

第一項 庶民と祐天

第三十六世として増上寺という大組織の中に入っていった祐天は、それでも庶民との接点を保つことを忘れなかった。庶民との接点とはすなわち名号の書写である。

松阪市に清光寺と言う名刹がある。ここには今でも祐天堂と呼ばれる経蔵が建っており、椅座像の祐天が安置されている。この像そのものは祐海の代以降のものと考えられるが、祐天の名号の彫られた道しるべよりの石柱が参道に立っている。ここには、「十万人講清光寺是より一町」と彫られている。

『利益記』にこの清光寺十万人講にまつわる話を二話載せる。そもそも十万人講は正徳三年頃「勢州松阪清光寺幡貞和尚日課念佛十万人勸進の願を発し」（中、五一丁）たことに始まる。清光寺二十三世幡貞は日課を誓った道俗に祐天の名号を与え本尊とすることを勧めたのである。おそらくは幡貞が祐天に請い、書写の名号をもとに印施したものであろう。

伝えられるところによると、名号を求めて五十万人もの人が集まったとされる（住職横井信之上人談）。先の道しるべのほかにも名号の書かれた板があり、そこには「授勢岳松坂清光寺日課百遍十万人衆了」と書かれ、願が成就したとき再び祐天から名号を受けたものと思われる。

る。間接的ではあるが、祐天の名号が十万人以上の人を教化したことになる。

この十万人講のためかあるいは江戸の伊勢商人のためか、伊勢には今なお祐天の遺徳が残る。射和いさわの伊馥寺には当時の檀家総代富山氏によって、祐天名号を中心とした水向石塔が建てられている。正徳四年八月十五日の日付がある。

今でも民間信仰として受け継がれているものもある。多気郡の宝泉寺植誉上人が祐天の百回忌を記念して建てた名号石（弘化三年）を、地元の人は祐天さまと言って今でも毎晩灯明を欠かさない。この石塔は鎌で止められており、悪因縁を断ち切ると言われている。また宝泉寺の山号立石山はこの名号石が起源とも言われ百回忌に建て直したとも考えられている（住職山口恵照上人談）。この宝泉寺には祐天の座像があり、当時から深い関係があったものと推定される。古い過去帳の宝永二年のところに異筆ではあるが「祐天上人來錫」と書かれている。宝永二年は伝通院住職時代であり、この頃実際に伊勢まで行ったとは考えにくい、隠遁中の畿内歴訪のとき立ち寄った可能性はある。そのときは伊勢の人も祐天という僧がどのような人かわからなかったのかもしれない。祐天が大僧正となつて、あのととき来た僧が祐天であつたとあとから書き加えた可能性もある。先に述べた松阪市清水の西方寺にある千体地藏も祐天の開眼であるという伝説があり、中央の地藏尊の体内には祐天名号が納められている（住職藤田信雅上人談）と言う。また、祐天像も安置されており、祐天とこの松阪の地は特別な関係があつたようである。

現在のところ確実なのはここで十万人講というものがあり、祐天名号が大量に配られたという事実である。

また、『利益記』下の「紀伊国屋太郎兵衛女得益の事」(二丁)によれば、「伊勢屋弥市といふ者。常に師の顧眊を蒙れば。此人を頼みて。十念拝受を願ひ。中略。増上寺に参り。香残の取合にて師の御前に出」十念を授かったことが記されている。香残とは祐天の隨身である(中、四十七丁)。このようにさまさまな人を頼って祐天に会いにいった人も少なくなかったことが推測されるのである。

『利益記』などに載せないが、祐天教化の物的証拠が最近発見された(清水寿氏蔵)。男性と女性それに尼の三体の木像を解体したところ、それぞれ戒名の書かれた札が出てきた。そのうち女性のものに祐天名号が大僧正祐天の名とともに記されていたのである。この木札の表には「宝心院松誓貞意大姉」「天和三己亥八月十六日」と記されている。表の日付と大僧正祐天の時代は合わないが、何らかの理由で祐天が回向したものであろう。ほかの木像の木札には「施主江戸中橋名主吉沢宗円」という名前が「為佛果菩提也」という文字とともに記されている。

江戸中橋と言えば名主高野氏の話が『利益記』(上、十一丁)に出ている。この話ももともとは天和二年に亡くなった女性の話であり、よく似ている。

詳細はわからないが大僧正となったあとにも、直接間接に庶民との接点を保ち続けた祐天

の姿勢がわかる。

このように、祐天は隨身時代から大僧正時代まで決して庶民とのつながりを断ち切ることはしなかった。それが真の民衆の教化すなわち念仏の弘通につながっていったと考えられるのである。

第二項 鎌倉大仏の復興

伝記によると、南都大仏の勧進への協力とともに鎌倉大仏の復興を成し遂げたことが知られる。

鎌倉大佛ヲモ師依テ因願ニ修飾佛像ヲ營構石垣ヲ并寄ニ附黄金数百兩ヲ以永為テ修業ノ之料ト

〔略記〕

師游方之時是亦有ニ念佛堂造建之願ニ故後「割注」伝通院住之時寄五百金「修飾佛像」營石垣「焉將」移「縁山」之時有「信士野嶋泰祐」者「下書」附欄外「野嶋氏者」云「美濃屋某」者也有「故被」貶謫「也」齋「金千兩」來奉「上師」師不レ受曰「我素願在」鎌倉念佛堂「子有」信則為レ造立堂宇「也野嶋喜諾大捨」資財「建」念佛堂及方丈庫裡「而始」不斷念佛「也爾後野氏遇」不祥「而家断滅故無」念佛修業之料「於是師」〔割注〕麻布住時「寄」附黄金五百料「以永為」念佛之料「也又某侯」〔割注〕從四位侍從伊賀

〔実録清書〕附